

## 第 30 回佐潟周辺自然環境保全連絡協議会意見書概要及び考え方

No.	該当箇所	ご意見の概要	ご意見に対する考え方
1-1	該当なし	<p>佐潟の水溫基本データの継続収集をした方がよい。</p> <p>佐潟の年間にわたる水溫に関するデータがない。佐潟のような浅い潟では、水溫は氣溫の変化に大きく関連することが多いが、その水溫自体どのように変化するかが記録されていない。将来の佐潟と未来の人のために、水溫の基礎データの集積を行ってはどうか。</p> <p>現在ある機器でのデータ記録</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・データロガーによる水溫データの収集を年単位で行う。</li> <li>・水溫測定間隔は1日6回</li> <li>・データロガー設置場所(全6箇所)</li> </ul> <ol style="list-style-type: none"> <li>① 水深の一番深い場所に表面、中間、底</li> <li>② 上潟から下潟の水路付近</li> <li>③ 佐潟橋付近の流心部</li> <li>④ 湧水の湧き出ている箇所</li> </ol>	<p>ご提案ありがとうございます。関係者と連携しながら設置に向けて具体的に検討いたします。また実施状況等は、第31回佐潟協議会でご報告します。</p>
2-1	資料3 P.5	<p>減肥料対策は水質改善に効果はあるが、アオコ対策として必要なか見極めた方がよい。必要な場合、農家への説明と協力を仰ぎたい。</p> <p>また、水質改善(水の富栄養化への対策)かアオコ対策かで対策の方法が異なると考えられる。前者では水の流入を防いだ方がよいが、後者では水の流入量を増やし、水が入れ替わるようにした方がよい場合もある。</p>	<p>資料の意図としては、湧水の流入を制限するものではなく、潟周辺に水路を設け、潟へ直接流入することを防ぐこととしています。</p> <p>アオコの発生を防ぎ、水質悪化を防ぐためにどのような方法が有効か、引き続き佐潟協議会で皆様と検討を行って参ります。</p>

2-2	資料3 P.9	<p>年間の水位の変動をみると、2017年は水位変化が少ない。このように水位変化が少ない状況が続くと、水辺の植物の植生は大きく変化する可能性がある。また、植生の変化が他の生物への変化につながる可能性もある。これは、水生植物の発芽と水位変化が密接に関わるためでコシガヤホシクサの保全生態学的研究においても立証されている。</p> <p>魚など他の生物の保護の意味があつて水位変化をなくしているのかもしれないが、せめて以前行われていた水位変化は保った方が良いと思われる。</p>	<p>2月に開催した意見交換会を踏まえ、地域の方の協力を頂き、今年度は水位管理の見直しを行っています。昨年度と比較し、どのような効果がみられるのか佐潟協議会でもご報告していきます。</p>
3-1	資料 2-2	<p>・外来種であるミシシippアカミミガメやクサガメ、アメリカザリガニによる水生植物減少の可能性は大いに考えられる。文献収集、水槽内での飼育実験、安定同位体構造を用いた食物網構造をアメリカザリガニやクサガメ、アカミミガメも含めて調べられれば現状をみていくうえでの指標となると思う。</p> <p>他の生き物とのつながりも安定同位体で評価するべきと考える。つながりが分かれば、駆除する際はアメリカザリガニとウシガエルをセットとした対策もとれると思う。鳥屋野潟ではタヌキやカラス2種、シマヘビがミシシippアカミミガメとクサガメの卵の捕食者となっていることが分かってきた。こうした外来種と在来種のかかわりや生態、現状の調査について取り組めるとよい。地域住民や大学とコラボで調査ができるとよい。</p> <p>・外来種の駆除については利用も考えるべきである。ミシシippアカミミガメを佐潟のイベントで食べることや研究論文にあるように肥料づくりに用いるなど、佐潟の恵みで育った資源として何らかの利用も模索したい。外来のカメであるクサガメは18世紀末、ミシシippアカミミガメは歴史的には最近定着したものであるためこれらを同じにとらえて駆除することは佐潟の生態系に負の影響がでて</p>	<p>ハスをはじめとした水生植物減少は様々な要因が指摘されていますが、外来種もその一つであるとかねてから指摘があります。外来種対策として、西区がミシシippアカミミガメを捕獲するトラップの設置を行っており、今後個体密度の調整が期待されます。ご指摘の内容は、今後の佐潟協議会でも協議をすすめ、実施できる機関と連携が可能であれば検討して参ります。</p> <p>ご指摘のあった外来種駆除と利用の両立は佐潟でも検討すべき事項と考えます。どのような方法で利用ができるか、佐潟協議会でご提案ください。またクサガメは、現時点では駆除の対象と考えておりません。</p>

		<p>くと思う。</p> <p>在来種による外来種の個体数調整も重要である。アオサギを含む在来生物がザリガニを捕食しやすい環境を形成することは長い目でみれば有効である。人が潟に入り、攪乱するよりもリスクは低いが一方で近くにサギコロニーが形成されると近隣からの苦情が多いようだ。</p>	
3-2	資料3 P.10	<p>ビオトープの考えでいえば地域の遺伝的な特徴を保存する上で、持ち込みは同じ流域が望ましいとされている。保存地区も周辺が好ましく、植物園での保管は種子での保管が望ましいのではないかと。</p> <p>水を切った佐潟の泥と希少種の種子を混ぜて土嚢袋に入れ、周辺の土の中に埋めておけばシードバンクとして保管できないか。放棄水田であっても掘り返して水を与えると水生植物が芽吹くことがあるためエコトーンで採集した希少植物の種子入りの泥を佐潟周辺で保管する実験をしても良いと思う。埋土種子の発芽実験をすることで保存可能期間の研究を行い、それに合わせて種子入りの泥を定期的に保管できればコストも安く済むのではないかと。</p>	<p>ご指摘の内容は、保全を進めるうえで非常に重要と考えています。佐潟でも、流域外からの持ち込みは行わないよう、関係者とも情報を共有しています。一方、生息域外保全に関しては、植物園ではこれまでも実績があり、管理された施設において累代で生育を行っています。生息域外保全を実施する際には、指針に沿って関係機関と協議しながら慎重に進めて参ります。</p>
3-3	資料3 P.10	<p>植物によってはポリネーター等の生き物もセットで保全を考える必要がある。地域性もあるため、希少種の開花時期にポリネーターの種特定調査ができればよいと思う。</p>	<p>ポリネーター(媒介者)の役割はそれぞれの種において研究がすすんでいると聞いています。保全策としてはご指摘のとおり、種の保全を図るうえで、関係する様々な生き物もあわせて保全するべきと考えます。佐潟では希少植物調査を毎年実施頂いているため、ご指摘の調査等も含め相談を行っていきます。</p>

3-4	資料3 P.12	<p>啓発活動は、かつての関わり方について文化として継承する術を考えると同時に他文化、他ジャンルとのコラボレーションによる新たなかかわり案をつくることも重要である。</p> <p>鳥屋野潟は空心菜の栽培による水質の改善策や外来種を利用したアート作品作りを行っている。</p>	<p>啓発活動もご指摘の通りと考えます。今後佐潟協議会でどのような連携が可能か、積極的なご提案を頂ければと思います。</p>
4-1	資料1	<p>現況のラムサール登録湿地の佐潟は、一にも二にも「アオコ対策」である。</p>	<p>令和2年度は水位管理を見直し、水質改善とアオコ対策について検討いたします。また2月開催の意見交換会でもアオコ対策に関する提案をいただきましたので、アオコに関する他事例なども調べます。</p>
4-2	該当なし	<p>新潟県民及び遠方の方々が佐潟に白鳥とかオニバスを目標に来訪したいが、佐潟湿地センターのHPが存在しないため、HPの開設と運用を要望する。福島潟を参照されてはどうか。</p> <p>「新潟の潟」の最初の基本情報のHPは「潟のデジタル博物館」と認識されている。当HPのリンク先のバナーには福島潟・瓢湖は掲示されているが「佐潟」がないため掲示を検討してはどうか。</p>	<p>ご指摘のあったホームページに関しては、西区地域課で佐潟のホームページを作成し、佐潟の見どころや自然情報等を掲載したページがありますのでご参照ください。</p> <p>また、潟のデジタル博物館にも、西区地域課のホームページをリンクできるよう検討します。</p>